

『復活の望みを抱いて』 (要旨)

聖書箇所：Iテサロニケ4:13-18

先週「召天者記念礼拝」をささげました。先に地上生涯を終えた主にある兄弟姉妹、家族、そして友人を思い起こしました。私たちは愛する者の死によって別離の悲しみを経験します。しかし使徒パウロは、キリスト者はそうした悲しみの中にあっても「互いに励まし合う」ことができると言うのです。パウロがテサロニケ教会のメンバーにどのように「互いに励まし合う」ように勧めたのか、御言葉に聴きましょう。

【1】教えられる必要のある事柄

パウロが手紙を書き送ったテサロニケ教会のメンバーは、主イエスの再臨に関する知識が不十分でした。そのため、どうせ再臨が来るのだから、と日々の仕事に意味を見出せず投げやりになってしまう人がいました。またある人は、今日明日にでも再臨が来ると待っていたので、再臨が来ないと落胆しました。再臨を待つ間に死んでいく仲間を目の当たりにし、彼らの行き先が分からず恐れしました。彼らが落胆し恐れたのは無理もないことです。再臨は誰も経験したことがない事柄だからです。しかも、それは常識に照らし合わせても理解し難く、想像することが難しい内容です。私たちも他人事ではありません。経験したことがない再臨に関して、どのように互いに励まし合うことができるのでしょうか。

【2】再臨に関する正しい知識

パウロは、キリストの再臨がラッパの響きと号令と御使いのかしらの声とのうちに天から下ってくることを教えています(16)。

- ・ラッパの響きは、軍隊のラッパのように、私たちに神の活動を注目させます(参照: 出エジプト 19:16,19・イザ 27:13・マタイ 24:31・Iコリント 15:52)。
- ・雲は神の臨在をあらわします(参照: 出エジプト 19:9,16・ダニエル 7:13・マタイ 24:30・黙示録 1:7)

パウロは、イエスの再臨に際して、まず、キリストにある死者がよみがえり、キリストとともにいると語ります(14-16)。次に、地上にいるすべてのキリスト者が雲の中に引き上げられ、空中で主と会うことを明らかにします(17)。

パウロは漠然と復活について語っているのではなく、使徒の権威をもって、再臨と死者の復活について具体的に説き明かしました。4:13-18は、テサロニケに書き送った手紙で、パウロがテサロニケ教会に明確に教えなくてはならないと考えていたことでした。

パウロは、福音を宣べ伝える度に死者の復活を語りました。彼は、死者の復活について言及することで、聴衆の心が潮が引くように離れてい

くことを経験しました(参照:使徒 17:32)。そうした聴衆の反応は無理もないことです。なぜなら、死者の復活は人の経験や知識の範囲を超えた内容だからです。彼はそうしたことを重々承知の上、それでも語り続けたのです。それは自分が伝えている福音の根幹に死者の復活があると確信していたからです。「もし私たちが、この地上のいのちにおいてのみ、キリストに望みを抱いているのなら、私たちはすべての人の中で一番哀れな者です」(Iコリント 15:19)

パウロは、イエスが死んで復活されたと信じる信仰者に勧めます。あなたもイエスと同様によみがえることを信じなさい、と。

【3】復活の希望に生きる

パウロは「これらのことばをもって互いに励まし合いなさい」と勧めました。「これらのことば」とは何でしょうか。それは再臨に関する正しい知識です。

キリスト者は、主イエスを救い主と信じ、イエスが人の罪のために十字架にかかって死なれ、そして三日目によみがえられたことを信じています。しかし、それが全てでしょうか。いいえ、そうではありません。その先があるのです。イエスが死んでよみがえられたのと同様に、私たちも死んでもよみがえるといえることです。私たちがイエスのよみがえりを信じることは、私たち自身がよみがえることを信じることであります。

パウロは、キリスト者が復活の希望に生きるためには、再臨に関する正しい知識を持つ必要があると考えました。「眠っている人たちについては、兄弟たち、あなたがたに知らずにいてほしくありません。」(4:13)

キリスト者とは、神が死者の中からよみがえらされたイエスの再臨を待ち望み、自分もイエスと同じようによみがえることを信じ、「これらのことば」をもって互いに励まし合い、復活の希望に生きる者なのです。

